# みんゆう随想

渡辺　裕之

福島市・渡辺エンジニアリング
代表取締役

## 山に魅せられて3

百名山追悼（3・11）登山北海道山旅は、十勝岳と旭岳を1日で制覇し、日帰り温泉で汗と疲れを流し、束の間の休息を取り、稚内港へ向けてハンドルを握りました。暫くして日が暮れ人も車も疎らになり、信号も人家もない直線道路を、演歌をガンガンかけて、一人寂しい気持ちを抑え走り続けました。

無謀な山旅は、寝不足と疲労には勝てず、途中の『道の駅なかがわ』で一杯飲んでバタンキュウ。7月14日、早朝に稚内港に到着し、キャンパーを駐車場に置いて乗船しました。

フェリーからの利尻岳は直に大観した者だけが感動と、旅のクライマックスを味わえる時間でした。やがて頂上の山肌は茶色に変わり荒々しさが漂い、程なく姿を隠したので不吉な予感がしました。

鴛泊港に到着し、海の幸をたらふく食べられそうな宿を探し、予約をして登山口まで送迎してもらうことにしました。宿のご主人に尋ねると往復で10～11時間はかかると言われたが、調子に乗って無理し9時30分に登頂開始し、4合目付近では超健脚の下山に出会いました。山の挨拶は異口同音に「今からですか。気をつけて下さい」。本心は『今頃、あのお爺ちゃん大丈夫かな？』と心配しているに違いありません。

天候は下り坂、山（島）の天気は変わりやすいという予感が的中しました。ゴアテックスに身を包み黙々と登り続け、長官山を通過するころから天気は急変。大雨と暴風に行く手を阻まれ、腹が減っても食べる場所がない『進むも地獄、引くも地獄』。事業を始めて似たような体験は幾度か経験しましたが、山旅では初体験。とにかく8合目の避難小屋まで登ることにしました。

辿り着いた小屋には、下山のパーティ数組が食事休憩と天候の様子を気にしながら、びしょ濡れにも拘わらず、山談議に花を咲かせていました。関東、関西に混じって東北弁が同調していると、学生らしい2人組が大量の物資を担ぎ上げ、小屋の片隅に食料、飲料水、缶ビールなどを積み上げて「失敬しないで下さい！」。明日からNHK・BSプレミアム百名山のロケが始まるとのことでした。

勇気ある下山を決意し、ひと風呂浴び、海の幸と生ビール、熱燗を脳裏に、雨、風、孤独と闘い、登山口で迎えを待ちました。